

平成22年3月31日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520381

研究課題名（和文） 連体修飾節構造に関する日韓対照研究

研究課題名（英文） Relative Clause Constructions:

A Contrastive study of Japanese and Korean

研究代表者

小熊 猛（KOGUMA TAKESHI）

石川工業高等専門学校・一般教育科・准教授

研究者番号：60311015

研究代表者の専門分野：認知言語学・認知文法

科研費の分科・細目：3001

キーワード：連体修飾，関係節化，主語マーキング，認知文法，参照点

1. 研究計画の概要

本研究は、日本語の連体修飾節内の主語の言語化に関する「認知モード転換」という観点に基づく一般化の理論的妥当性を、(1)日本語、韓国語の通時的データ調査分析、(2)方言レベルでの両言語の振る舞いの調査を通して検証を試みるものである。

語用論的關係節と呼ばれる被修飾名詞と連体節内述語が統語的關係にない連体修飾節表現の存在が、日本語の關係節化を「認知モード転換」として分析することの理論的妥当性を示していると考えられる。

言語類型論的に日本語に近いと考えられ、語用論的關係節の存在が報告されている韓国語の連体修飾節に着目して、「認知モード転換」という観点に基づく分析の理論的妥当性の検証を試みるものである。

2. 研究の進捗状況

本研究が対象とする名詞修飾節の構造に関して日韓語が示す明確な差異の一つは、属格主語の許容度である。日本語はかなりの許容度を示すのに対して、現代韓国語は殆ど許容しないとする文法記述が一般的である。しかし、本研究の代表者・分担者が過去に行なった予備調査では、韓国語南部方言話者の間で比較的容認度が高いことが観察された。そこで、韓国語南部方言の分布する地域の中心に位置する麗水で、名詞修飾節に属格主語が用いられる例文をまとめた questionnaire を用い、インフォーマントの文法性・容認度の判断を引き出す作業を中心とするフィールド調査を行なった。その結果、予備調査で見られた言語観察は、概ね支持されることが確認できた。

類型論的に似ていると考えられる韓国語が日本語と同様の關係節化を反映すると仮定すると、韓国語の語用論的關係節の主語もまた属格でマークできることを予測する。この点を確認するため、予備的聞き取り調査を韓国人研究協力者および複数の母語話者に実施した。調査結果は予測に反して韓国語の語用論的關係節において属格主語は基本的に容認されないというものであった。興味深いことに、韓国語の語用論的關係節は属格主語を容認しない一方で、主語名詞が主格マークされる場合と、形態論的にはゼロマークとなる場合があることが調査で確認できた。この結果は、韓国語の属格主語の非生産性は、連体修飾節内の主語が形態的にはゼロ形式で現れる構文パターンと関係している可能性を示唆していると考えられる。

九州地方の方言においては現在も主節主語が「ノ」でマークされるとする先行研究を踏まえ、熊本県において若い世代の方言話者に聞き取り調査を実施した。その結果、主節主語を「ガ」でマークするのが定着している一方で、主節主語が「ノ」でのマークされた文も適格文として容認されることが確認できた。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

（理由）

理論的予測を検証するフィールド調査およびアンケート調査がおおむね計画通りに進んでいる。

4. 今後の研究の推進方策

日本語の「NP1-ノ NP2」に対応する韓国語

表現が「NP1-ZERO NP2」となるものが存在することを踏まえて今後の調査研究を進める必要が明らかになった。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

小熊猛, ガ・ノ交替現象から見る日本語の関係節化方略に関する予備的考察, 日本語文化, 第14輯, pp.19-39, 2009, 有

KOGUMATakeshi, A Cognitive Approach to Nominative/Genitive Conversion in Japanese, In Fey Parrill, Tobin Vera, and Turner Mark (eds.) *Meaning, Form, and Body*, 129-147. Stanford, California: CSLI Publications. 有

[学会発表](計3件)

Koguma, Takeshi. A Cognitive Approach to Nominative /Genitive Conversion in Japanese, 9th Conference on Conceptual Structure, Discourse, & Language (CSDL9), Oct. 18th, 2008. Case Western Reserve University (Ohio, U.S.)

小熊猛, ガ・ノ交替現象から見る日本語の関係節化方略に関する予備的考察, 韓国日本語文化学会, 2008年11月8日, 秋季国際學術大會, ソウル東國大(韓国)

小熊猛, ガ・ノ交替への認知文法アプローチ, 日本語学会第137回大会ワークショップ, 2008年11月29日, 金沢大学